

シンポジウム

21世紀に向けての環境教育

コーディネーター： 谷口文章

シンポジスト： グロリア・スナイヴリー

シンポジスト： 川嶋宗継

シンポジスト： 金田 平

環境教育学会が設立されて、あしかけ10年になろうとしている。環境教育は、日本の教育大学やフィールドの実践家による環境教育の長年の研究会、また学会の創設などによって、さらに環境庁、文部省の奨励などによって近年、日本全国に知られるようになった。そして現在では、実際に学校教育、社会教育、生涯教育などにおいてかなり実行されてきている。

しかしながら問題点もある。環境教育の方法論はひと通り出尽くしたといえようが、学校教育の場合、それぞれの科目で行われる何を理念としてどの方向に教育していけばよいのか、社会教育の場合、どのレベルで誰を対象としておりその方向はどこなのか、また、ライフ・サイクルの考えに応じた生涯教育の場合も、種々の段階のライフ・サイクルがありどこに焦点を合わせたらよいのかが、十分に理解できていないといえよう。

この意味で各種の科目や種々の対象者や場所、また各ライフ・ステージ、それぞれに共通する環境教育に原理が今や必要となっている。端的に言って、それは「環境教育学」の要請といえよう。

それでは、環境教育学とはなにか。それは一つの学科なのか、環境教育の方法論なのか、教育原理の中に新たに重要な位置を占める環境教育学原理の一つなのか、さらにまた環境教育の哲学なのか。それは、たとえ教科が相異していても共通する環境教育のなにものか、またたとえ方法論が相異していても共通するなにか、さらに各ライフ・ステージに一貫する原理が含まれていなければならないであろう。

そのような原理としての環境教育学が、現在問われているのかも知れない。つまり、それは環境教育の定義と理念、環境教育の方法、環境教育の評価、環境教育の運営、環境教育制度と行財政、環境教育の教師論、環境教育の範囲等々を包括する大きな枠組みの原理と考えられる。

「21世紀に向けての環境教育」についてのシンポジウムを行う場合、このようなパースペクティブの下に議論されなければならないであろう。今回のシンポジウムでは、環境教育の先進国であるカナダにおける環境教育の歴史・問題点・見通しをグロリア・スナイヴリー氏からモデルを示していただき、その後、日本における環境教育の新しい方法論・教材開

発・指導者養成について学校教育の立場から川嶋宗継氏から、そして日本における環境教育の問題点を社会教育・自然保護の立場から金田平氏に指摘していただく。そして「21世紀に向けての環境教育」について会場の皆様とともに考えていく予定であるそれが、環境教育学への第一歩となればと願う次第である。

1998年 日本環境教育学会第9回大会 （大阪教育大学）

研究発表要旨集より

[[RETURN](#)]